

6 令和5年度 学力向上アクションプラン

1 中期学校経営方針

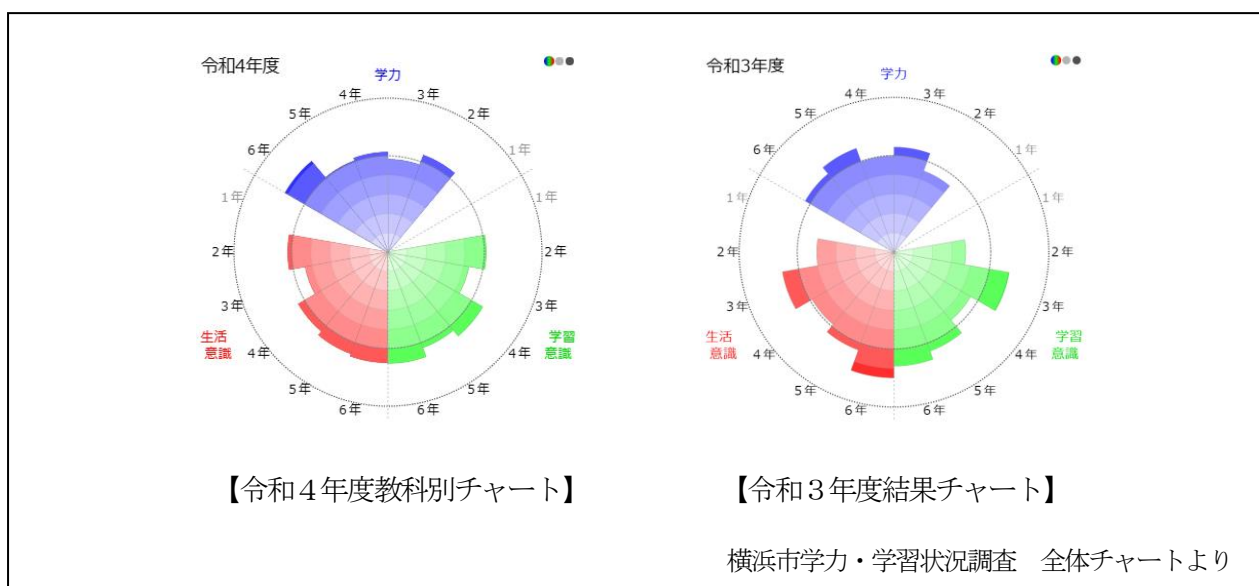
(1) 学校経営中期取組目標

学校経営中期取組目標	
○児童がのびやかに、安心して学ぶことのできる学校づくりを目指します	
<ul style="list-style-type: none"> ・「認め合い」「褒め合い」「共感し合い」を大切にした親和的な学級経営を通して児童の自尊感情を高めます。 ・「児童の思い」「聴くこと」を大切にした指導を進めることを通して「主体的・対話的で深い学び」の実現に努めます。 ・協働的な職員集団を創ることを通して、いじめの未然防止・早期発見・早期解決に努めます。 ・日常的な体力づくりを進めると共に、保健・食育の学習を通して健康な生活に関する理解を深めます。 ・50周年記念事業で深めたまちとの関わりを大切にしたまちとつながった学習、地産地消(食育)をより一層推進します。 	

(2) 学力向上に向けた重点取組分野・取組目標・具体的取組

重点取組分野	取組目標	具体的取組
授業改善 (学習指導)	「知識・技能」の力を根幹とした「思考・判断・表現」の力の育成のために、国語科や算数科を中心とした学年連携を意識した授業づくりに取り組む。	①「主体的・対話的な深い学び」を実現するために、重点研究として取り上げている算数科の指導法を中心として、対話的な授業づくりに協働的に取り組む。 ②各教科のカリキュラムを確認・再考しながら、教科主任が中心となって授業改善及び向上に向けた情報を発信していく。 ③メンター研修に全職員が協力し、共に授業力向上に努めていく。
担当	評価委員会 研究推進部	

2 横浜市学力・学習状況調査等からの実態把握



(1) 学力の概要と要因の分析

近年の本校の学力向上アクションプランの取組みにの成果として、「親和的な学級づくり」「主体的な学びに向かう授業づくり」「対話的な学びの授業展開」の定着により学びに向かう姿勢が向上している様子が見受けられる。令和2年度から令和4年度の期間は、コロナ禍という環境下での学習指導において、全職員が工夫を凝らしながら児童の主体的な学びを支えることができるように取り組みを進めてきた。

令和4年度の調査結果全体としては、平均値が昨年度の調査結果より増加もしくは同等値という結果となり、市全体の平均値にも全学年がほぼ到達していた。特に昨年度第6学年の調査結果は、市の平均値を大きく上回っており、昨年度から学力を更に伸ばすことができたことが分かる。昨年度の調査結果で市の平均値を下回ってしまっていた現第4学年も、市の平均値に近づくことができた。昨年度の調査結果を受け、全学年の学習指導において、「基礎学力の向上を目指した授業づくり」や「分かる・楽しめる授業の展開」を教職員一同が連携し、アイデアを出し合いながら取り組んだことが今年度の調査結果に結びつく要因となったと考えられる。また、生活意識調査の「睡眠時間の長さ」や「読書の習慣」という項目に関して意識の高い学年ほど学力調査の平均値が高い傾向が見られた。来年度の生活意識への声かけや学習内容への適用について、データ結果からより分析を深めて教育活動につなげていきたい。

昨年度、保護者を対象に実施した学校評価では以下のような結果が各項目で見られた。

質問項目		回答数 回答率	はい	いいえ	分からない	前年度との 比較値(%)
①	お子さんは、楽しく学校生活を送ることができていると思いますか。	R4回答数	538	10	22	-1
		R4	94%	2%	4%	
		R3	95%	1%	4%	
②	お子さんは、日々の授業の中で進んで学びに取り組んでいると思いますか。	R4回答数	468	23	79	-4
		R4	82%	4%	14%	
		R3	86%	2%	12%	
④	教職員は、子ども一人ひとりを大切に、個に応じた指導・支援に取り組んでいると思いますか。	R4回答数	460	11	98	-4
		R4	81%	2%	17%	
		R3	85%	1%	14%	
⑤	学校は、児童や保護者からの相談に応じて、チームで協力して対応していると思いますか。	R4回答数	413	9	149	-2
		R4	73%	1%	26%	
		R3	75%	1%	24%	

上記の項目だけではなく、その他の質問項目についても「分からない」の回答の増加したことにより「はい」の回答が減少する結果となった。徐々に授業参観や面談の機会で開催と保護者が接する機会が増えてきているものの、情報発信や家庭との連携といった視点で大きな課題が見られる結果となった。①と②の項目に関しては、学校生活や学習内容がより家庭と連携して推進していくための授業展開や情報発信に努めていきたいと考える。④と⑤の質問項目については、これまで本校が重点的に行ってきた「個に応じた支援」「教員間の協力」という項目ではあったものの、経年変化の数値として大きく下降してしまう結果となっている。「いいえ」の数値が急激に上昇したわけではないが、「コロナ禍で保護者と関わる機会が少なくなっているのだから仕方がない」といった考えを拭い去り、保護者の不安な想いを全職員で受け止め、「開かれた学校」づくりや学校教育目標を実現していくためにより検討を行い、取組みを推進していく必要がある。また、学級担任だけでなく、学年の担任団や児童指導専任がチームとして協力し、指導方針の統一を図りながら児童を見守る体制づくりを強化していく。

(2) 本年度の学習指導・支援の方向性について

昨年度に引き続き、「親和的な学級環境」を根拠とした「対話的な学び」を実現するために校内重点研究として取り上げた算数科の中で実践していく。そして、特に「対話的な学び」の具体化に重点を置いていく。ただ話すだけではなく、既習の知識等を活かして理由を明確に伝え合うという視点を大切にするために、基礎学力向上にも力を入れて研究を進めていきたいと考える。

3 令和5年度 学年としての具体的取組

第1学年

- 国語科では、言語についての基礎的な知識・技能の定着を図り、自分の考えだけでなく、根拠をもって表現ができるように、文章の型を示しながら学習活動の場面を設ける。また、読み聞かせ、並行読書などを取り入れ、本に触れる機会を設け、語彙力を増やす。
- 算数科では、個に応じて基礎的な知識・技能の習得のための指導を丁寧に行うと共に、対話的に問題解決を行う場面を設定することで、活用力の向上を図っていく。
- 生活科では、子どもたちの気づきを大切に、不思議に思ったことや疑問に思ったことから学習を展開することで、学習意欲を高めていく。

第2学年

- しっかりと、話を聞く姿勢を身に付けられるようにする。自分の考えをまとめ発信する場面や、気付いたことを発信する場面を多く設定することで「伝える」力をのばしていく。学習に対する意識の高さを引き続き伸ばしていきけるよう、各教科を通して学習の楽しさを感じさせる展開を工夫する。
- 国語科では、日常で使用する漢字を多く習うので、生活の中で正しく書けるように指導する。また、本に触れ合う時間を多く設け、言語能力を向上させていく。
- 算数科では、計算等の基礎的学力をさらに定着できるように工夫する。また、算数的活動を取り入れ、考えを伝え合う機会をつくることでより表現する力をつけられるようにする。

第3学年

- 国語科では、自分の思いを表現する経験を積むため、文章の構成を示しながら書く活動を取り入れる。また、国語辞典や図書館の資料を活用し、興味関心の幅が広がるよう働きかけていく。
- 算数科では、考えを式や図を利用して伝える活動を通じ、児童の表現する力、発信する力を育てていきたい。また数量に対する包括的な感覚を身につけ、多面的なとらえ方ができるようにしていく。
- 理科では、本物に触れることを大切に、必要な基礎的な技能（正しい器具の扱い方や安全への配慮等）が身につくようにする。
- 社会科では、身近な地域や横浜市の地理的環境等について、より理解が深まるようにするため、具体的な視点をもって見学や調査ができるよう、学習の進め方を工夫していく。

第4学年

- いずれの教科においても、基礎的な知識・技能の定着を目指す。そのために前学年の学習内容も振り返り、新学年での学習とのつながりを考えながら学習に主体的に取り組む姿勢を養うようにする。また、自身の考えを文章で表現することができるようになるために、国語科の学習を中心として「書く」ことを積極的に取り入れ、思考力や表現力の向上を図っていく。
- 算数科では、「しっかり教える」場面と「しっかり引き出す」場面を明確に設定した授業を展開する。また、対話的に問題解決を行う場面を設定することで、自らの考えをもち、根拠を示して伝える力の向上を目指す。
- 社会科や理科の学習では、体験的な学習や身近な事象についての観察・調査等の活動を通して、実感を伴った理解の定着や興味・関心の深まりを促し、主体的に事象に関わりようとする態度を養っていく。

第5学年

- 国語科では、様々な分野の本を読む機会をもち、言語に対する興味関心を広げていく。相手や目的に応じ、調べたことが伝わるように段落相互の関係に注意して文章を書く力を身につけられるようにする。
- 算数科では、必要感のある学習問題を提示することや、対話的な学びを通して、学習への意欲を高めるようにする。また、数学的事象について、根拠を基に筋道を立てて考え、対話的活動につなげることで「伝える」力の向上を図っていく。
- 社会科では、資料で調べたことや体験したこと、その仕事に従事されている人を通して、理解を深められるようにする。
- 理科では、「予想、実験観察、考察、まとめ」の学習形態をとり、根拠に基づいて判断する力を身につけられるようにする。

第6学年

- 国語科では、様々な分野の本や様々な言葉に触れる機会をもつことで、言語感覚を養い、活用することができるように環境を整える。また、自分の思いや考えを目的に即して文章にしていく力を身に付けるため、文章構成を提示し、それをもとに書く活動を取り入れる。
- 算数科では、自分の考えを相手に分かりやすく表現する力や多面的に考える力、様々な考えからより合理的な方法を見つけ出す力を身に付けられるようにする。そのために、意図的に順を追って説明する活動を取り入れたりと、対話的な問題解決を行う活動を取り入れたりする。また、既習事項の復習などを繰り返し行い、基礎学力の定着を図っていく。
- 社会科・理科の学習では、教科担任制のよさを活かし、全クラスで統一的な指導を行い、学力を高めていく。

個別支援学級

- 個別の教育支援計画・個別の指導計画に基づいた、個々の認知様式に合わせた教材を工夫し基礎学力をつける。
- 子どもの発達段階に応じて各学年の取り組みを参考にし、必要な取り組みを行う。
- 栽培などの体験的な学習に取り組む中で、生活面でのできる事を増やせるようにする。
- 見通しをもって意欲的に取り組めるような活動を工夫し、学習に主体的に取り組めるようにする。